

## 佐伯惟治の史跡を訪ねて

高 木 嘉 吉

佐伯惟治は大分県の南部から、宮崎県の北部にかけて、遺跡・神社・墓石・伝承として多くのものを残している。本稿では実地に臨んで、それを紹介することにした。

惟治のことは『大友興廃記』や『梅牟礼実録』にかなり詳しく記されている。

魔法修業の舞台となった山上寺は脇部落背後の山上で、山上に十アールばかりの平地が寺の跡として残っている。魔法の師春好の墓は、寺跡から北側に下った南部落の庵寺に祀られている。梅牟礼城趾は山上寺から指呼の間にある。南北に長い山頂が城趾である。本丸・二の丸・三の丸の跡もはっきり指摘できる。本丸跡には、尾高知様(惟治)を祀った石碑や春好を祀った石碑がある。何れも靈験あらたかなりとの伝承が生んだものである。

梅牟礼山(二三米)は、位置・高さから一般人・小学生・中学生の遠足の好コースである。折角登山した人に梅牟礼の印象を深めるために佐伯史談会は、先年梅牟礼城趾の碑を建設した。梅牟礼合戦に勇名をはせた惟治の顕彰を含めての建碑である。

梅牟礼城は四面絶壁で難攻の地であるが、圧倒的な兵力に完全包囲されたら不落ではあり得ない。「城孤にして援なくば、その命知るべきのみ」は孤城の定めであり、惟治が白杵長景の勅降に応じたのも、城の命運を察してのことであつたと思う。

惟治は餅原監物以下二十名を供として梅牟礼を下り、其の夜は竜護寺に泊った。竜護寺は緒方惟栄の家臣山本源太有明が、惟栄の菩提を弔うため、草庵を営んだのが濫觴というが、惟治は大永年間に新に竜護寺を建立して、佐伯氏の菩提寺とした。そ

の寺の位置は藤田勇一氏の屋敷の附近であったという。

竜護寺で惟治は、本尊の千手観音を伏し拝みながら、

枯れてだに 咲くべき花の種しあらば

拾はせ玉へ 落つる木の実を

の一首を詠じた。

翌日は駒を進めて堅田路に入った。城村でそれ迄伴っていた嫡子千代鶴を富田四郎五郎・佐伯伊賀の両名を添えて残した。

惟治の一行は黒沢に入った。馬上の惟治に新しい柄杓に水を満して捧げる二八の若狭は一幅のあわれな絵巻物である。かくて一行は三河内をめざして石上峠に進んだ。石上峠は黒沢と三河内の境界である。深い谷を隔てて、前方に馬場の尾がある。惟治主従は馬場の尾で、しばらく世を忍んだが、寒気・食糧不足に悩まされた悲惨な生活であった。

惟治主従は最初から薩摩の島津氏への仕官を望んで南下をはかっていた。馬場の尾を引払って三河内に入った。石上峠を下れば、本口・梅木と三河内の中心に到着する。しかし此の時には、すでに臼杵長景の手が廻っていた。一行を見かけた三河内人士から、罵声や石つぶてがとんだ。危険を感じた一行は再び豊日国境の山中に入った。雑木雑草の茂った道なき山中に、安住の地を求めて必死の彷徨が続いた。

やっと見つけたのが尾高知であった。そこは豊日国境の分水嶺から、三河内側に二百米ぐらい下った所である。三河内の人のかつた富尾神社があつて、雨露を凌ぐこともできた。附近に谷があつて水も得られた。波当津・直海・市振・古江等海岸の部落に行つて、食糧を求めることもできる。一行ははつと安堵の胸をなでおろした。

しかし此の安堵は長く続かなかつた。大永七年十一月二十五日の早朝、数百人の新名党に襲撃された。臼杵長景に買収された三河内人士である。二十人の従士は必死に防戦したが衆寡敵すべくもない。ついに惟治は長景の不実を恨みつつ、自刃して果てた。時に三十三才であつた。

惟治の死後、長雨・旱魃・霖雨・台風等の天候異変や、悪疫（腸チフス）流行の災害が続いた。素朴な人々はこれを惟治の怨霊の祟として恐れおののいた。そして此の怨霊を鎮め、怨霊の神異にすぎるため、惟治を祭神とする神社を建立した。これが佐伯十社、日向六社として知られるものである。

佐伯十社

富尾大権現 佐伯市黒沢

富尾大権現 蒲江町丸市尾

此花咲栄神社 佐伯市石打

鷗尾大権現 弥生町宇藤木

富尾大権現 直川村吹原

鷗野尾大権現 直川村月形

富尾大権現 直川村神の原

八坂神社（合祀） 弥生町江良

星宮神社（合祀） 佐伯市坂山

富尾大権現 佐伯市海崎

俗に佐伯十社と言われているが、さらにもう一社ある。

弥生町植松の愛宕神社境内に、摂社として富尾神社が祀られている。

右十社の祭神は、惟治の外それぞれ二、三神が合祀されている。神社の創祀された時代は、大永の次の享祿・天文年間である。

日向六社

鷗野尾大権現 北浦町梅木

尾高知神社 北浦町イヤザメ

地下神社（合祀） 北浦町古江

尾高知神社 北浦町古江

鷗野尾権現 北川町長井

鷗野尾神社 延岡市南浦

惟治を祀った神社は、右十六社のほか、宇目町に五社ある。それは左記の通りである。

鷗野尾神社 宇目町千束

鷗野尾神社 宇目町大原

鷗野尾神社 宇目町市ノ瀬

天満社（合祀） 宇目町寺家

天満社（合祀） 宇目町中獄

惟治終焉の地の尾高知神社について附言したい。梅木に光休寺と称する禪寺がある。尾高知で憤死した、惟治の屍を納める人もないのを憐れんだ光休寺の第二代の住職が、憤死の地に屍を納めて、墓石を立て懇に弔った。章徳院殿前薩州刺使大機正徹大禪定門がその戒名である。

位牌も作られ光休寺の仏壇に置かれて供養されている。なお富尾神社の簡素な建物は、光休寺の手によって、仏式の廟に建て替へられて今日に及んでいる。

惟治の怨霊の威力に対する人々の尊信は根深く、尾高知廟の祭典（仏式）には、遠近を問はず、多数の人々が集って尾高知廟が賑ったものである。しかし近年参詣する善男善女が少なくなったのは時代の流れであろう。

尾高知廟を通常尾高知神社と称することに就いて、古江の木原氏のことについて、古江の木原氏は惟治時代から神官で、尾高知廟を神社として祀り、自宅にも尾高知神社を祀っている。

北川町瀬口にお頭様がある。近來お頭神社として、人々の尊信を集めている。伝承によると、惟治が尾高知において憤死のさい、部下の一人が主人の首を敵手に委ねるのは残念であると、惟治の首をとって此の地まで逃れて来たが、急に首が重くなって持ち運べなくなった。ここには宝泉寺と称する庵寺があり、盲目の法師が琵琶を弾じながら、経を唱へていた。惟治の部下は法師に事情を打開けて、二人で厚く葬った。惟治の靈異はすでに此の地にも聞えていたので、村人の手によって墓が建てられ、尊崇の的となったが、更に墓を収める廟が建てられて、お頭様、お頭神社として祀られることになったという。靈驗あつたらたかなりと參詣者多く、墓前に香煙の絶えることがない。

最後に惟治の墓の所在地及び戒名を掲げよう。今日まで七個確認しているが、小さい碑石は他にまだあることだと思ふ。祀人によって戒名が異なるのは自然の成り行きであろう。

- (1) 大知院殿前薩州刺史惟治正徹大居士 (弥生町深田)
- (2) 大光院殿故薩州刺史悟嶠正徹大居士 (佐伯市西野)
- (3) 章徳院殿前薩州刺史大機正徹大禪定門 (北浦町尾高知)
- (4) 章徳院殿前薩州刺史大徹正毅大禪定門 (本匠村宇津々及波寄)
- (5) 従五位下朝散大夫前薩州大司惟治大機正徹禪定門 (黒沢富尾神社の法名)
- (6) 大智院殿先薩正慶血大居士 (北川町瀬口御頭神社)
- (7) 章徳院殿前薩州刺史大機正徹大禪定門 (本匠村笠掛)

最後に若干の所感を述べて纏めとする。

惟治が郷社、村社、無格社と社格はさまざまであるが、二十七社（お頭神社を加えて）に祀られていることは、一考すべきこと

とである。郡司の身分でこの様なことは、他に例がない。怨霊神がその本質であるが、怨霊以外の何かがあったのではないかと思う。

富尾神社の名は、終焉の地尾高知に富尾神社が祀られていたことに由来する。富尾神社は、神代の神々を祭神として、三河内の人々が祀ったものであるが、惟治の神異（天変地異、悪疫流行等）を富尾神社の祭神が、惟治に権現して、かくの如き神異を現すのだとして、富尾大権現と名づけて、惟治を祀ったわけである。

鷓尾神社については、惟治が死後鷓に化して天翔り、種々の神異を現したという伝承によったもので、鷓野尾大権現がよくそれを表現している。

謀叛の疑に対して、惟治は大友義鑑に極力その無実を訴えているが、必ずしも無実の疑でもなかったようである。

元来佐伯家の当主は、大神惟基、緒方惟栄の栄光を偲んで、大友何する者ぞの感慨を持つ者が多かった。惟治もその一人で、戦国争乱の時勢に乗じて、肥後の菊池義武、筑後の星野親忠等と共に謀して義鑑へのクーデターを謀っていたのは事実のようである。義鑑は、梅牟礼攻めと同時に、肥後・筑後にも出兵して、菊池・星野に一撃を加えている。

宇目町千束の鷓野尾神社は、千束楽を伝えている。これは惟治憤死の際、従者の何人かが、重囲を破って逃走したが、敵の目をくらますため、野の花で頭を飾り、女装して脱出したという伝承にちなむもので、花の冠をいただき、花を飾った丈余の竹竿を背負って楽に合せて舞うさまは、実に雄壮優美なものである。

佐伯市黒沢の富尾大権現には、杖踊を受け継がれている。これも雄壮且つ優美なものである。祭礼に当って杖踊を奉納することは、他の富尾（鷓野尾）神社でも、多く行われている。

惟治の足跡を实地について記述した。惟治が今なお大分県南部、宮崎県北部の民衆の間に生きているのは、その非業の死に対する同情や佐伯氏に対する思慕によるものであろう。